

【 復活讃詞 第1調 】

きゆ せ いしゅよ、イウデヤのひとはかをふ うじて、へいそつ
 救 世 主 墓 封 兵 卒

なんちの いさぎよきみ をまもると き、なんちは みっかめに ふくか つ
 爾 潔 軀 守 時 爾 三日目 復 活

して、せ かいに いのちを たま えり。ゆえ にてんぐんは なんぢ
 世 界 生 命 賜 故 天 軍 爾

いのちを ほどこすのしゅに よんでい う、ハリスト スや、こう えいは
 生 命 施 主 呼 曰 光 榮

なんちの ふくか つに き し、こう えいは なんちの く にに き す、
 爾 復 活 歸 し、光 榮 爾 國 歸 す、

ひとりひとを いつくしむのしゅ や、こう えいは なんちの おもんぱかり
 獨 人 を 慈 しむのしゅ や、光 榮 は 爾 の おもんぱかり

に き す。

こう えいは ちちと ことせいしんに きす、いまも いつも よよ に、アミ ン。
 光 榮 は 父 と 子 聖 神 に きす、今 も いつ も よよ に、アミ ン。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

しととひとしく どうざな るもの ちゅうじつにしてしんちなる
 使 徒 等 と し く ど う ざ な る も の 忠 實 に し て しん ち な る

ハリスト スの えきしゃ、せいなるしんに えらばれた るふえ、ハリストスの
 ハ リ ス ト ス の え き し ゃ、せいなるしんに えらばれた るふえ、ハ リ ス ト ス の

あい に みちた る うつわ、わがくにの こうしよ うしや、
 あ い に み ち た る う つ わ、わ が く に の こ う し ゃ う し ゃ、

あわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいの
 憐 聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生

ものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 者 我 等 を 憐 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
 聖 常 生 者 我 等 を 憐

こうえいはちとことせいしんにきす いまもいつもよよにアミン。
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世 に ア ミ ン。

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
 聖 常 生 者 我 等 を 憐

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、
 聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生 者

われらをあわれめよ。
 我 等 を 憐

司祭) (黙誦: ^{しゅ な よ き もの あが ほ}主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、^{ざ もの なんぢ そのくに}ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

^{こうえい ほうざ あ つね あが ほ}の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、^{いま いつ よよ}今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 】

司祭) ^{つつし き}慎みて聽くべし、^{しゅうじん へいあん}衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{しゅ われらなんぢ たの ごと なんぢ あわれみ われら た たま}プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅ よ 、 わ れ ら なんぢを た の む が ご と く 、 な んぢの あ わ れ み を
主 我 等 爾 頼 む 如 く 、 爾 ぢの あ わ れ み を

わ れ ら に た れ た ま え 。
我 等 垂 給

誦經) ^{ぎじん}義人よ、^{しゅ}主の爲に^{よろこ}喜べ、^{さんえい}讚榮するは^{ぎしや}義者に^{かな}適う、

しゅ よ 、 わ れ ら なんぢを た の む が ご と く 、 な んぢの あ わ れ み を
主 我 等 爾 頼 む 如 く 、 爾 ぢの あ わ れ み を

わ れ ら に た れ た ま え 。
我 等 垂 給

誦經) ^{しゅ}主よ、^{われらなんぢ}我等爾を^{たの}頼むが^{ごと}如く、

な んぢの あ わ れ み を わ れ ら に た れ た ま え 。
爾 ぢの あ わ れ み を 我 等 垂 給

【 使徒經 (アポストロス) 229 端 エフェス書 5 章 9 節～19 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒パヴエルがエフェス人に達する書^{じん たつ}の讀^{しょ よみ}、

司祭) ^{つつし}謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{ひかり}光の子の如く^こ行え。^ご蓋^{おこな}神の實は^{けだしん}凡の慈愛と^み公義と^{およそ}眞實とに在り。^{じあい}爾^{こうぎ}

^{しんじつ}とに在り。^あ爾^{なんぢ}
^ら等神の^よ悦ぶ^{ところ}所の何なるを^な審^{つまびらか}にせよ、^み實を^{むす}結ばざる^{くらやみ}暗昧の^{おこない}行に^{あづか}與る^{なか}勿れ、

^{むしろ}甯^{これ}之を^せ責めよ。^{けだし}蓋^{かれら}彼等が^{ひそか}隱^{おこな}に行^{こと}う事は、^い言^{または}うも亦^べ耻づ^{およ}可し。^せ凡^{こと}そ責めらるる事は

^{ひかり}光^よに由りて^{あらわ}顯^{けだし}る、^{およ}蓋^{あらわ}凡^{こと}そ顯^{ひかり}る事は^{ゆえ}光^いなり。^い故^{もの}に云^おえるあり、^し寐^るぬる者^{起き}よ、^し死

^{ふくかつ}より復^{なんぢ}活^{てら}せよ、^{ここ}ハリストス^{もつ}爾^みを照^{おこない}さん。^{つつし}是^{むち}を以^{もの}て視^{ごと}よ、^お行^{こと}を慎^{こと}みて無^{こと}智^{こと}の者の如く

^{すなわち}せず、^{もの}乃^{ごと}智^{とき}ある者の如く^{おし}せよ、^ひ時^あを惜^こむべし、^{ゆえ}日は^{しりよ}惡^{もの}しければなり。^{もの}是^{もの}の故^{もの}に思^{もの}慮^{もの}なき者

^なと爲^{なか}る勿^{すなわち}れ、^{かみ}乃^{むね}神^{なに}の旨^{さと}の何なるを^{また}覺^{さけ}れ。^よ又^{なか}酒^こに酔^よう勿^{ほう}れ、^{どう}此^{どう}れに由^{どう}りて放^{どう}蕩^{あり}あり、

すなわちしん み せいえい かしょう ぞくしん しふ もつ くち とな ころ わ
乃 神に満てられよ。聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱え、心に和して、

しゅ さんび
主を讚美せよ。

(比較用 口語訳)

光の子らしく歩きなさい——光はあらゆる善意と正義と真実との実を結ばせるものである——主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥ずかしい事である。しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。明らかにされたものは皆、光となるのである。だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから、立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにはではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、ア ril l i ya、

【 ア ril l i ya 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

誦經) ^{ねが わ ため あだ かえ われ しょみん したが かみ さんしょう} 願わくは我が爲に仇を復し、我に諸民を従わしむる神は讚頌せられん、



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

誦經) ^{おおい すくい おう ほどこ あわれみ なんぢ あぶら もの およ そのすえ よよ} 大なる救を王に施し、憐を爾の膏つけられし者ダヴィド及び其裔に世に

^{た もの われなんぢ な うた} 垂るる者よ、我爾の名に歌わん、



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ 所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書66 端 12章16~21 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



^{なんぢ の し ん に も} 爾の神にも。

司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



^{しゅよ こうえい は なんぢに き し こうえい は なんぢに き す} 主、光榮は 爾に 歸し、光榮は 爾に 歸す。

司祭) ^{つつし き} 謹みて聴くべし、

司祭) ^{しゅ さ たとえ もう い あると ひと たはた よ みの かれみづか はか い} 主は左の 譬を設けて曰えり、或富める人に田畝の善く 實れるあり、彼自ら 忖りて曰

^{われなに な けだしわ さくもつ おさ とくろ またい われか な わ} えり、我何を爲さんか、蓋我が作物を藏むべき 處なし。又曰えり、我斯く爲さん、我が

^{くら こぼ さら おおい もの た こうち わ ことごと こくもつ たから あつ わ} 倉を毀ちて、更に 大なる者を建て、此の中に我が 悉くの穀物と貨物とを聚めて、我が

^{たましい い たましい なんぢ たねん ため たくわ おお たから やす くら の} 靈に謂わん、靈よ、爾には多年の爲に 蓄えたる多くの貨物あり、息み、食ひ、飲

^{たのし しか かみ かれ い むち もの こんやなんぢ たましい なんぢ もと} み、樂めと。然れども神は彼に謂えり、無知なる者よ、今夜 爾の 靈を 爾より索め

^{しか なんぢ そな とくろ もの だれ き およ おのれ ため たから つ かみ おい} ん、然らば 爾が備えし 所の者は誰に歸せんか。凡そ己の爲に 財を積み、神に於て

^{と 富まざる者は是くの如し。}

(比較用 口語訳)

イエスは一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思いつめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食べ、飲め、楽しめ』。すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

しゅよ、こ う え い は なんぢに き し 、 こ う え い は なんぢに き す 。
 主 光 榮 爾 歸 光 榮 爾 歸

※聖体礼儀3（金口イオアン）へ